



(c) 2017 by Yoshitaka Nishizawa
「動員」の結果としての政治参加

Aschの同調行動の実験

- ・ 齊藤勇編 1987, 『対人社会心理学重要研究集 I 社会的勢力と集団組織の心理』誠信書房.
- ・ Asch, S. E. "Effects of Group Pressure upon the Modification and Distortion of Judgements." In H. Guetzkow, ed., Groups, Leadership and Men. Carnegi Press, 1951.



同調しない人、した人

- ・ 自信型
 - グループを意識して、葛藤が大きい
- ・ 自立型
 - 「自分は自分」という主義に従う
- ・ 忠実型
 - 葛藤も大きい、業務に忠実
- ・ 認知変更型
 - 多数と同じように見えてしまう
- ・ 判断変更型
 - 自信のなさから多数が正しいと信じる
- ・ 行動変更型
 - 多数とは違って見えるし、多数が間違っていると判断しながら、行動で同調



Aschの同調行動:なぜ同調するのか

- ・ 社会化論的説明
 - 個人の側から—真実を求め、「正しくありたい」と欲するので、他人の見解を受け入れる。
 - 集団の側から—集団としての力をその成員に行使し、逸脱を抑制したい。そして、集団目標の達成と環境への適応を図る。
- ・ 葛藤の回避
 - 集団から逸脱することから生じる葛藤の回避
- ・ 「同調 = 集団を安定性に導く過程」と定義可



援助行為についての研究

- ・ Latane, Bibb; and Darley, John M. 1970. *The Unresponsive Bystander: Why doesn't He Help?* Englewood Cliffs: Prentice Hall.
- ・ B. ラタネ・J. M. ダーリー 1977, 『冷淡な傍観者』竹村研一・杉崎和子訳 ブレーン出版 1977年.

L&Dの検討:介入のモデル

- Step 1: 緊急事態への注目
- Step 2: 緊急事態発生 の判断
- Step 3: 個人的責任の程度 の判断
- Step 4: 介入様式 の決定
- Step 5: 介入の実行



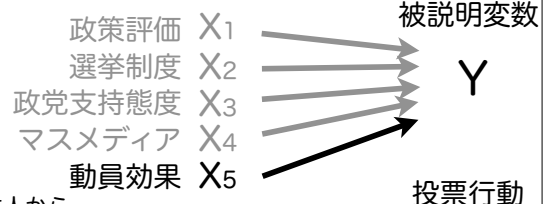
L&Dの検討:介入のパラドックス

- ・ 「人数が多ければ、誰かが助けるだろう」
- ・ じつは、他人がいることで、そして他人が多いほど、介入の各ステップで逆の効果
- ・ 見られていることの逆効果
 - 行動を抑制、気づくのが遅れる、「おせっかい」と思われたくない
- ・ 見ていることの逆効果
 - 手本を他人に求める。他人が冷静なのだから、慌てる必要なしとの判断



この授業での今回の「投票説明モデル」

説明変数群



- 候補者本人から
- 政党の職員から
- 選挙運動員から
- 知人から
- 職場の上司から
- 家族から

●社会学的な側面からの補強

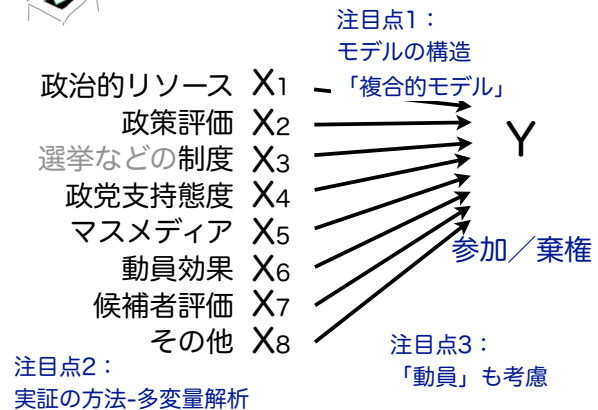


動員効果の確認

- どうすれば、動員の効果が確認できるか。
 - 実験的アプローチ
 - Gosnell, Harold F. 1977. *Getting Out the Vote: An Experiment in the Stimulation of Voting*. Westport: Greenwood Press.
 - 世論調査によるアプローチ
 - Rosenstone, Steven J. and John M. Hansen. 1993. *Mobilization, Participation, and Democracy in America*. New York: Macmillan.
 - 西澤由隆 1995. 「アメリカにおける政治参加のパズル」
Mobilization, Participation, and Democracy in America by Steven J. Rosenstone and John Mark Hansen 『レヴアイアサン』17号
- 三宅一郎・西澤由隆 1997. 「日本の投票参加モデル」綿貫謙治・三宅一郎『環境変動と態度変容』木鐸社 所収.



三宅・西澤1997「投票参加説明モデル」



注目点3： 「動員」の考慮

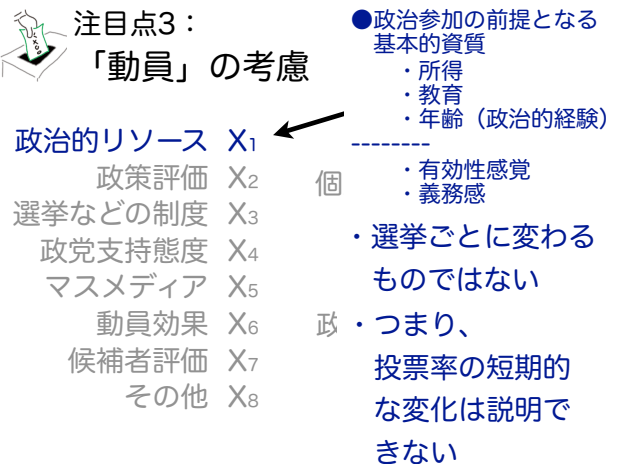
政治的リソース X₁
個人的属性要因^{レバニヤク}だけでは説明できないことがある。
(R&H 1993の指摘)

個人的属性要因 vs. 政治的環境要因

-> 投票率の短期的な変化



注目点3： 「動員」の考慮



三宅・西澤論文の「最大効果」

- 回帰方程式による推定とシミュレーション

$$\begin{aligned} \text{投票/棄権} = & b_1 \times \text{政治的リソース} \\ & + b_2 \times \text{政党・候補者評価} \\ & + b_3 \times \text{地域との心理的距離} \\ & + b_4 \times \text{政治的動員} \\ & + b_5 \times \text{制度要因} \end{aligned}$$

- 「最大効果」= 回答者の誰一人として動員を受けない場合の投票確率と回答者全員が動員を受けたとした場合の投票率の差



三宅・西澤論文 分析結果

- 表2: 投票参加の要因モデル、1983年・1993年衆議院総選挙
 - 最大効果・危険率
 - 効果を示す要因
 - 義務感
 - 議席配分についての関心
 - 持ち家かどうか
 - 後援会会員
 - 組織依頼
- } この「動員効果」に注目